

やってきたゴドー、ドイツ座にて―徒然なるままに―

ベルリン、2012年12月22日

森鷗外が1887年に”DonCarlos“を見たドイツ座は、森鷗外記念館の間近に位置している。同座では、東ドイツ時代に数多くの能や文楽の来独公演も行われていた。2011年の大震災後には、森鷗外記念館はドイツ座 / ミヒャエル タールハイマー氏と、ITI (国際演劇研究所)と協力し、数々の募金活動を行った。ドイツ座と日本との関係は、時代と歴史を経て結ばれており、また同座のレパトリーには、日本との関連性を持つ作品も上演されている。

クリスマス直前、ドイツ座からのニュースレターを通じ、2012年12月19・20日、別役実作の“やってきたゴドー”の公演があることを知った。

19日は鷗外記念館で”ファウスト - 1913年森鷗外訳 -“の講演があったため、初日は観劇できなかったが、翌20日は時間もでき、チケットを手に入れることができた。

多くの人がクリスマス前後には予定を入れているため、通常このような時期にゲスト公演するには大きなリスクである。たいていの方が劇場に足を運ぶ時間がないからである。

しかし、喜ばしいことに、二公演ともすでに売り切れであった。

2日間という短い公演期間にも関わらず、このゲスト公演は多くの劇団、劇場、日本に関心のある人々に多にアピールできたであろう。

もちろん私も日本の劇場関係者や、この観劇の機会を逃すまいと来ていた多くの知人達に出会った。

そして、彼らはまったく落胆しなかった。

期待している人がいなかったとしても、

誰も別役作品を読んだことがなかったとしても、

この公演まで名取事務所を知らなかったとしても…

公演後話をした誰もが例外無く、感銘を受けていた。

それは単純に”別役実のベケットに対する日本的な答えは、私たちヨーロッパ人にとって極めて興味深い”という事である。

舞台では”待つ”ことのむなしさは全面に押し出されることなく、”待つ”という中に、様々な登場人物のそれぞれの人生と関係性が相互に展開されていた。

常にバラバラに行き来し、最後にゴドー自身を取り残される。

登場人物達は、現実目の前で起こったことを認めず、見ようとならない。

なぜなら彼ら自身の物語を内包しているからである。

彼らは、”待つ・探す”という行為自体より、”探す”ということについて論じることに夢中になる。

見つけることにはすでに興味がないという別役作品のアクチュアルな観点に非常に感銘を受けた。

クリストフ・シュリンゲンジーフ(映画監督・演出家)の舞台作品は”すべては繋がっている”という格言を持ちいった。

このアプローチはインターナショナルではないか?”やってきたゴドー”の制作にも現れている。

様々な登場人物の出会い、そして”探す”という行為は、観客にとって格別なエンターテインメントである。おそらく今回の俳優陣は、日本に於けるトップの俳優達であるのではないかと感じた。彼らの演技は、「言語重視の日本現代演劇には期待できない」と、日本語学者達の一般的であった過去の意見を覆すものであった。(そのために過去にこのようなゲスト公演の実現は困難であった。) 観るものを一秒も飽きさせない俳優達の高い演技力、シンプルに削がれた演出、それでいて意味を失わない衣装と装置。ほとんどなにも無い舞台は能を思い起こさせた。洗練され、且つ具体的な演技、冗長性の無い適材適所な配役。一人一人今後も記憶に残るでしょう。際立って印象を残した登場人物といえば、とても日本人的な表情と表現を出した”ゴドー”と”受付の二人の女性”であった。

そして、当然、作品の中には日本独特のユーモアが生きていた。お芝居を観てこれほど心から満足して笑ったことはありません! 私だけではなく、私の昔の同僚も上演中声をひそめて私にこう言った。

「素晴らしい。これですよ、日本人が愛しているものは。彼らにしかこのように演じることができない!」

言葉遊びの数々…

ゴドー、ゴロー、ゴトー、

”受付”の意味深さなどはドイツ語ではこうは表現できない。日本語でしか表現し得ない世界観である。

日本語を習ったことのある人ならすんなり理解できる平叙文でありながら、非常に理解しやすく翻訳された字幕だった。

言語のこのような簡素化(パートごとに分けられており、哲学的な深みもあり)は外国で外国語で上演する上で理想的である。

(1979年から1981年まで早稲田大学で新劇史を学んでいた頃に観た、白石加代子さんの公演は理解するのに非常に骨が折れた…)

要するに言いたいことは、今回の名取事務所公演のようなクオリティーであれば、ドイツ座の大ホールでも満席にできると、確信したということである。

次回公演の際は、私も是非公演の協力をさせていただきたい。

公演前には知り得なかった多くのことを、公演後に経験することができた。

「ドイツにおける日本年」をきっかけとした交流以来、ドイツ座芸術監督であるウルリッヒ・クオン氏と名取氏との強く結ばれた協力関係は、より多くのことをもたらした。

この協力関係の継続と、今後もクオリティーの高い作品がベルリンで上演されることを心から願う。

ベルリンのカルチャーシーンは、知的且つ厳しく、質の高い舞台芸術を要求される。

名取事務所は日本文化大使の意味も担い、その厳しいワンシーンに足を踏み入れた。そして優れた公演を通し若い世代を惹き付た。

昨今、ドイツの若い世代の日本への興味が、”カワイイ”や”マンガ・アニメカルチャー”に走りがちなことに対して、それだけが日本の文化輸出財の優先になっていることを残念に思う。

名取事務所のドイツ座での公演は、単に在ドイツの日本人コミュニティに発信されたのではなく、大多数のドイツ人観客に日本文化や日本芸術への関心を抱かせた。

それこそが本当の意味の上質な文化交流である。

ドイツ・日本交流の先駆者である森鷗外も、彼の生誕150年に際し、このような文化交流がなされたことを喜んでいるであろう。